

合わせて11校の作品を審査させていただきました。どの作品も個性的で高校生の興味関心が身近に感じられ、ほのぼのとは共感できる内容だったかと思います。テレビと違い、ラジオは、音声のみのメディアなので、ごまかしがききません。テーマ設定や構成の流れ、コメントの方向、さらに、どこで話を転換させて、どうリスナーを引き付けさせるか、ということがより、重要になってくると思います。そうした観点からと言いますと、椋山女学園「共に生きるということ」は、名古屋入管という難しいテーマに挑み、バングラディシュの方の事例を踏まえながら、「共生社会をどう進めるか」ということについて、多角的な視点で検証がなされていました。ひととき引き付けられたのが、体調を崩した方のお世話をした際に、発せられた言葉が「治ったのは神様のおかげ！」だったというエピソードです。支援者の方からすると、「せっかく良くしてあげているのに…」とってしまうところですが、こうした文化の違いを踏まえながら、どうしたら日本で仲良く暮らしていけるのか、と思考を続ける姿勢に関心しました

また、光ヶ丘女子「知ることで変わること」は、ロシアによるウクライナ侵攻を題材にしていますが、冒頭、桃太郎の鬼退治の事例から入り、「あなたの視点は偏っていませんか」と問いかけ、構成的には非常に素晴らしかったと思います。後半、「自分で知って確かめることが大事」、という生徒のインタビューがありましたが、思わずハッとさせられる内容でした。メディアで流される情報は、公正・中立を標榜していたとしても、何らかの恣意性がどうしても入ってしまい、視点が偏りがちです。SNS でも様々な情報が飛び交う昨今、「自分で知って確かめる」ということがますます重要になってくると思いました。

菊里の「推し活カツカツ狂騒曲」の最後の部分のどんでん返しは、出色の出来栄でした。また、それが「実生活に支障がない範囲で推し活を行うこと」との結論でうまく回収されていたと思います。メディアでもよく取り上げられる「推し活」ですが、冒頭のアンケートにもあった通り、かなりすそ野が広がっているんですね…。時事性と高校生ならではの視点をうまく融合させて企画だったかと思います。

特に印象に残った3点に言及させて頂きましたが、ほかの高校の作品も試行錯誤の跡が随所に感じられました。放送を作る、ということにおいては、ほかの作品の良いところや手法をどんどんまねていくということが重要だと思います。皆さんで切磋琢磨して頂ければと思います。